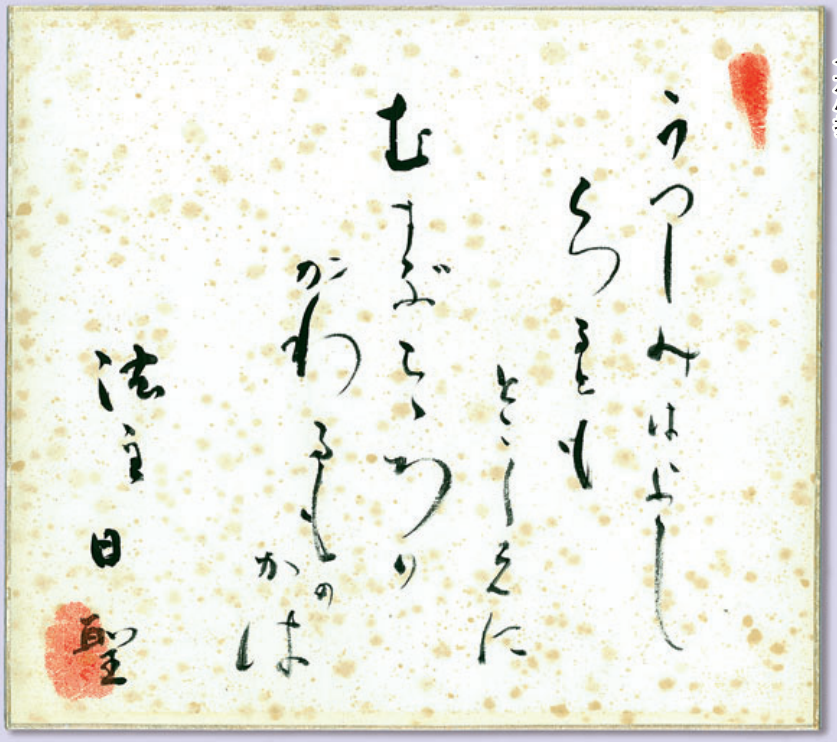
おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成29(2017)年
2月号
通巻558号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　平成29年2月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp



◀左小指

▶右親指

うつしみはよし　くつるとも　とこしえに　むすぶこころの　かわるものかは　　法主様直筆

平成５(1993)年２月23日　申孝祭法話より

日本の歴史が本当の継承をしてこなかったこと

法主　矢追日聖（満81歳）

二月二十三日はどういう日か

今日は大分に寒い日でございますね。

『日本書紀』という今から千二、三百年前にできた日本の正史の中に、神武天皇が九州からヤマト（倭）の方に移動してきて、色々トラブルがあったんですけれども一応おさまって、ヤマトの大王さんと政権交代され、第一代として天皇になったという時のことが書いてあります。

それで南の御所（ごせ）の柏原という所で即位の式をされたというようなことが書かれています。橿原神宮のある橿原とは違うんですよ。ヤマトには歴代の元の大王さん達――長曽根一族の系統がまだたくさんおりますから、神武天皇はなかなか北を向いて来ることができなかった。

それが四年ほど経って、大体、北の方がおさまってきたというので、南の柏原から一族を連れてヤマトの鳥見へ出て来た。鳥見は長曽根の本拠地です。世の中がおさまってきたということは、歴代のオオヤマトの神さん達――ご先祖さんのことですね、そのご恩である、力であると、感謝のお祭りにお出でになった。

『日本書紀』には「鳥見山中の霊畤（れいじ）（まつりのにわ）」でお祭りをしたというふうに書いてあるんです。現在の大倭神宮の、あの場所へ出て来られたんですよ。

その記念日が、現在の太陽暦に換算すると二月二十三日ということになるんです。

今の皇太子さんは二月二十三日に生まれてはるし、天皇陛下の誕生日は十二月二十三日で私と同じですし、大倭とどんな関連があるのか、何か知らん縁のある日でございます。

政権交代

「東に美き地あり」と、九州よりも良い所やということで、神武天皇がヤマトに来られたと、『日本書紀』に書かれています。天業恢弘（＝帝王の事業をひろめること）に最適の場所であるから、自分達もそこへ向かわなければいけない。その地へ移れば、本当のまつりごと、即ち祭政一致の時代ですから、政治ができるというというようなことなんです。

その時代にヤマトは、大親元のオオヤマト（大倭）の国であって、北は若狭・丹後・播磨の辺りから南の熊野まで近畿一円の、非常によく治まった国だったと思うんです。それから歴代の大王さんが何代続いたんか千年も二千年も経った頃に、神武天皇の時代になってガッと来てるんやわな。

ヤマトの側から言えば、西の方から瀬戸内海を通って国を侵しに来たんだろうという考え方も出てくるし、戦さが起こりました。けれども、九州の人達は生駒の山を越えることができず、日下の戦いで負けてしまったんです。

それで熊野の方にまわって南から入って来たというわけなんです。やはり戦争の勝ち負けというのは、武器の問題です。そうしてみれば、ヤマトの文化も九州の文化も大体同じ、対々であったと思うんです。色々あったらしいけども、金鵄が飛んで出たり、まあ結局、政権交代して九州側が「大和」の大王さんとしておさまるようになったわけです。それが現在の天皇家の血筋でございますけれどもね。

抹殺されている歴史

神武天皇以降が日本の正史になってます。それ以前のことは、もう神話、おとぎ話になっているんです。ヤマトの歴代の人格霊というものは、全部無視されておるんや。

それが世の中の表に出てこなければ、霊界人も我々人間と一緒でね、やっぱり腹が立つんですわね。政権交代する以前のヤマトの人達の御魂というもの、功績というものを、後世の人達に顕彰しなければいけない。これが私の役目なんです。

一番最初にいらっしゃったのが、須佐緒命と稲田日女命です。これはもう何万年も前の人か知らないんですが、そのお子さんが饒速日命です。

この人が初代で、その子孫が代々、その時代の言葉で長曽根とか鳥見とか言われたこの土地の王さんだった。歴代の大王さんが、神武天皇が出て来るまでに、ここにいらしたわけなんです。ずっと大親元のオオヤマトだったんです。長曽根の大王さんが居ったなりゃこそ、神武天皇がヤマトに出て来て政権交代ができたと思うねん。

そういう人達の功績が、全部抹殺されているんですね。だから日本の国は、本当の継承をしていると言うことができない。国が治まってこないんです。

神武天皇から二千六百年経った時に、私が講演して「長曽根日子……」と口にするだけで、「弁士注意」と（※特高警察から）言われたような時代もありました。

出雲の土地を全部譲ったという国譲りの神話がありますけれどもね、どうもねえ、そういうように間違ってるんじゃないかと思うんです。

こちらの大王さんは饒速日命の系統です、さっきも言うたように稲田日女命さんと須佐緒命さんのお子さん。饒速日命と言うたら、あまり知らんかもしれないけど、後世の人達は、その大王さんの働きの面によって、色々名前を付けるんです。大国主命はたいてい知ってはると思う。大物主命さんも、大己貴命さんも全部、饒速日命さんの別名なんです。

それには色々、学者の説もあるんやけれども、私が大倭神宮へお参りした時に、饒速日命が出てこられたと思って見たら、それが今度は大国主に変わるし大物主に変わるし、同じ一つの霊体であるんです。後の人は別々の人格やと思っていますけど一つなんです。

表わさなければいけない私の因縁

神武以前のヤマトを治めておった歴代の大王さん達の御魂というものを理解して継承し、現在の人達と古い時代の人達の心と心の交流をはかっていくというのが、大倭の宗教的な行き方なんです。

神武天皇の来られた時の大王さん個人の名前が、ナガスネヒコやと思って、後の人が伝えているだけのことで、饒速日命の系統がずっとヤマト歴代の大王なんです。

物部氏というのを聞いたことがあると思いますが、それは長曽根一族の中の部族なんです。神さんをお祭りすることと、兵戈（＝戦さ）の権を持っておったんですよ。

神武天皇の政権になった時に、大和の土地を治めるには、その土地の人達が信仰しておった神さんを無視することは絶対だめなんです。それで九州から連れてきたご先祖の天照大神と、大倭の古い神さん――饒速日命・稲田日女命・須佐緒命の

個人の名前でなく、これを総称した「大倭大国魂大神」という名称にして、神武天皇のまあ宮中ですわね、そこに一緒にお祭りしてあったんです。

それがね、どういう経過があったんか知らんけども、第十代の崇神天皇の時代になってゴチャゴチャとまたトラブルが起こったのか、九州から連れてきた天照大神は、大和から放り出されてあちこち転々として、結局、伊勢で今日までおさまってはるねん。

大倭大国魂大神は、そのまま宮中におられたんだけども、後の人は、今現在も大和神社（天理市）というのがありますけど、そこでお祀りするということになったんやな。大倭神宮は長曽根の本拠地であるし、ここへは持ってこれないわけや。向こうの大和神社もここの大倭神宮も、同じ神さんなんです。

そういうようなことですが、これはまあ信じる人は信じたらええし、疑う人は疑ってもかまわないんです。とにかく私にはそのように出てくるんでね、やっぱり受け入れざるをえない。私には、それを表わさなきゃいかん因縁があるんですね。

霊界の神武天皇

十二月四日、金鶏が出たという日は、それによって争いが収まったという平和の記念日です。

今日の二月二十三日は、神武天皇が鳥見に来て、霊畤を立てて「大孝を申べ」られたと『日本書紀』に書いてあります。それで申孝祭という名称にしておりますが、大倭のご先祖さん達に感謝のお祭りをされたということですね。天皇が自らお祭りをされたというのは、日本の歴史においては最初だと思うんです。

それで今日は大本宮の月次祭でありますが、私は大倭神宮の方へお参りをしてきました。神武天皇も一族郎党を引き連れて南から来られて、今の時代ですからもうおさまってますし、私が大倭の代表として話をして握手してきたわけなんです。

そんなん、皆さんはおかしいと思うかもしれないけど、肉体の持たない人間も肉体が無いだけで、肉体の持っている我々と同じ人間同士なんです。神武天皇というたかて、我々と同じように飯食うてクソこいてはってん。たまたま代表者だったということで、私は大倭の代表者ですからね、対々なんです。

まあ威張って言うようやけど、霊界にはもう権力的なものは全然無いんです。やっぱり霊界の人達は拝んでもらわないといけないからね、そうするとお祭りするこっちの方が上なんです（笑）。

もちろん威張っていませんけど、今日も、神武天皇はやっぱり礼を低うして感謝のお祭りをされた昔の姿が出てくるんです。礼儀ですから私も頭を下げます。こんなこと言うたら不敬罪になる時代もあったけどね、霊界の人達と私の話やからね、現在の天皇陛下と私の話と違うんですよ。

一人一人が自覚を持って

今日は、そういうようなめでたい記念日です。けど、何か知らんけど西からえらい風が吹いてます。見たところ、この嵐に乗って九州の神さん達が出てきます。天気予報によると九州がかなり荒れているらしいから、やっぱりそういう気がこっちを向いて出てくるんです。空が荒れるからといって、悪い意味ではないんですが、まあ船が遭難したりするのは気の毒やけど仕方がないですね。

申孝祭の意味は、九州と大倭の古い人達がここでまた一緒になって、日本の過去においての色々のツミやケガレというものを祓い、皆が仲良くしていくようにということです。今日も神武天皇と私は、そんな話し合いをしてきました。

日本は大東亜戦争で敗けて大きなツミを祓ったわけですが、これからは日本だけというような小さなことでなく、世界の人達が平和になっていくことを考えなければいけません。心して自分自身がそうならなきゃいけない。みんな一人一人がそういう気持ちになっていく時代です。

聖歌「黎明大倭」五番の「昭和維新の人柱」という言葉はそういう意味なんです。昭和は、まあ私が昭和の時代にこういうようなことを始めたからですし、維新はすべて改めるということです。神さんや霊魂を数えるときは柱と言うんです。だから人柱とは、一人一人が自覚する柱となるということなんです。（※「ひ」は霊界、「と」は現界で、「人」で両方が協力する意味という説明も別の機会にはされている）

どこの国であろうと世界中が、国境も民族も超越して、地球の上に居る者が仲良くいこうやないかと、そういう心になった人達、それが人柱なんです。

あの歌は、一応、私がつくったことになっているけれど、霊界から言われたことを写してそのまま書いたんです。考えたわけじゃないのに頭に出てくる。四番まで出てきて、最後の五番だけはね、すぐには出てきませんでした。斎庭で、潔斎して座った時に出てきました。

「人柱」は本当の世界平和を祈るような人間になってほしい、ならなきゃいけないということなんです。今の時代には、行政上、日本・韓国・中国とか国はありますけれども、心の中においては国境を全部なくしてしまって、一つの人間として

みんなが幸せになっていこう、ならなきゃいけない。そういう自覚を一人一人持ってもらうことが「昭和維新の人柱」なんです。

今日も改めて皆さんに、その自覚をして頂きたいと思います。

（文責・編集部）

あじさいアルバム⑰

敬称略

▼年月不詳、読書中

▲昭和15年、皇紀2600年記念の大演習の打合せに来た石原莞爾師団長（右）と参謀。庄山（法主様の実家）にて弁当で昼食

◀昭和46年8月1日
奈良県文化会館にて、大倭教主催講演会
左3人目から森下新蔵、今井冨蔵、法主様、ガンジー塾の2人、杉山龍丸、五十嵐章

▲昭和48年4月21～23日、大倭にて、「日本の共同体を語る会」、左から法主様、手塚信吉（キブツ協会）、原川義雄（一燈園）

▶年月不詳、鈴月かあさん

◀昭和44年5月4日
慰霊教導の旅の途次
徳島にてタライうどん
左から
今井冨蔵、法主様、柴地則之

◀平成4年5月26日
大倭会館にて甲野善紀

▶拝殿で体操中、79歳の法主様
平成3年10月11日

シリーズ

大倭への道・大倭からの道

熊本県水俣市
高倉敦子（下）

水俣へ

「秩父には一生分の仕事がある」と我が師に言われたが、それを見事に裏切って、ある日突然旅に出ることを決めた。南に向かって移動を開始、最後にたどり着いたのが水俣だった。

と同時に武甲山山頂が爆破され、以後採掘に拍車がかかっていった。みるみる山容は変わり、標高は1336メートルから1304メートルとなった。経済発展による崩壊は著しく、数々の登山道が閉鎖され、神秘の洞窟も知らない間に発破で飛ばされ跡形もなく、無念極まりない。

水俣でまず私を待っていたのは水俣湾の埋め立てのための浚渫工事。今でも忘れられないのは生きた魚をドラム缶に詰め込む作業で、腐った臭いがあたりに満ちていたこと。結局そのドラム缶を埋め込むようにして膨大な量のセメントで水銀へドロを封じ込めるという工事を目の当たりにすることに。山も海も悲鳴をあげていた。

そんなさなかに、私は大倭紫陽花邑と出会い、矢追日聖さんと初めてご対面することになる。

「あんたんとこお山あるやろ」と開口一番、法主さん。「はい、武甲山です」。「そうそうそれやわ」という応答からはじまったのが平成4年の8月のこと。私には見えないが、その武甲山で修行をした霊人が私に会いたくてここに来とるわ、と法主さんは言われた。しかも私の父方の祖父を指導していたんだそうな。「髪は真白で肩まで、上下白の装束」とのこと。いかにも行者らしい。

祖父は秩父の奥にある三峯（みつみね）神社で勤めをしていたが、本来は山で修行をしたい人なので神社勤めで治まらず、お暇乞いを二度もして、山に入ったということが後でわかった。家族は苦労したらしいが、最後はフリーの神官となって地域の相談事にのっていたと父から聞いた。それ以上の詳しいことが何もわからないが、ただお山に対する思いみたいなものがやっと法主さんを通して私のからだに入った気がするのだった。

「あんたがやりたいようにやったらええんやわ」という最高の祝福の言葉をいただき、私はいったい何をしたいんだろうかと、それからずっと問い続けているわけで、結局山に行くことで見えてくると理解したのだった。水俣から秩父へ、そして秩父からまた水俣への行ったり来たりが続いている。

水俣の水源地、大森遺跡と出会う

水俣の自然を語るとき、忘れてならないことがある。それは地下水脈が毛細血管のように山から海へと拡がり脈々と息づいているということ。山の水が地下に潜って海に真水が湧き出すことを「ゆうひら」と呼び、よい漁場になっている。森が生み出す水の素晴らしさによって海が蘇るのであるなら、水俣の森こそいのちの源。

先日、照葉樹が見事に残った茂道という集落の近くの海岸の森でキャンプをした。満天の星の下で焚き火をしているとどんどん脳がゆるんでくるのが気持ち良い。そのあたりのことに詳しい友達が、山からの清水が湧き出し海水と淡く混じり合っている大事な場所に連れて行ってくれたが、その水を舐めてみたら、ほんのりとした塩味。「この水が命を育む」のに必要で、コンクリートで覆われてしまえばその交じり合いができなくなるということを初めて知らされた。ここから川に沿って山へと遡っていくと水俣の水源地、26ケ所の湧水と縄文の遺跡のある湯出（ゆで）にたどり着く（写真）。

8年前、その湯出を深く愛し知り尽くしている林業の山口さんと初めて出会った。水湧く森に産業廃棄物最終処分場建設計画が持ち上がり、これだけはなんとか阻止をしたいと、作戦としての立木トラスト運動をいっしょに展開したのがご縁である。山口さん所有の山の前が産廃のトラックの搬入経路に当たったのがきっかけだった。

そんなある日、山口さんが一枚の写真を見せてくれた。なんとも不思議な巨石の森、それが湯出大森のイワクラとの最初の出会いだった。きっと古代の人が拝んでいたに違いないという彼の言葉に惹きつけられ、何度か現地に連れて行っていただいたが、岩には不思議な文字か絵のようなものが刻まれていて、なんとも形容しがたく畏れさえ感じる。大森地区では昔からその巨石の真下にあたる一帯を「神様の通る道」と呼んでいたらしい。おまけに畑からは縄文土器が出土していた。あまり近づいてはいけないという言い伝えが残ってい

足あと足おと

さらに必要とされる生命観
～25年目の再確認（その3・最終回）

大阪府茨木市
松浦武夫

ることを山口さんが土地の古老から聞いていた。

しかし、その地域の人たちは誰もその巨石の存在については知らなかったという。結局産廃の建設は阻止できてほっとしたのだが、そのイワクラに立ち会った者として、忘れ去られたままにしておくのが忍びない。どうしたものかと手をこまねいているうちに、あっという間の8年、想定外の地震までやって来た。山口さんも高齢になり、行動を共にできる時間にも限りがあることに気がついた。いよいよ大森遺跡の保存のことを真剣に考える時が来たようだ。新たな扉が不思議な巡り合わせとともに開かれる気がしている。

心の福祉を志して

奈良時代に例えば一つの建物を国家権力が建てます。人頭税のような形で仕事をさせ、栄養も乏しく倒れて郷里にも帰れないし、大陸との交流により未知の病気も流入してきたし、病者や貧困を生じさせた。その対応として悲田院や施薬院がやむを得ずできたとされます。後世、福祉と言われるが、現実は贖罪であるとしています。私はここにも法主さんの斬新な視点を感じるのです。

そのような時代の悲田院や施薬院と違うもの、権力の横暴の余波とは異なる志で、法主さんは福祉を造ろうと願ったと思いました。

自身が権力の座にあった光明皇后ですが、そういう過去の時代を反省したところの、個人の願いとしての社会福祉の実現であると説明されています。「らい」者の膿を吸う光明皇后伝説は有名です。その伝説から受け取れるような気持ちかと法主さんは思っていたが、そうではなかったというのですね。単純な福祉観ではないのです。

光明皇后は千二百年後に、奈良時代と違うものを、心の福祉として実現するように法主さんに託したのだと話されていました。

有限の命を楽しく暮らすが根本

法主さんは現界と霊界を観ながら、それと現在への繋がりを説明されました。「過去の人の想い、念というか、それを受け継いで生まれてくるのや」。大東亜戦争のあった時は戦国時代の想念を受け継ぐ人が出てきたが、しかし自然の摂理として今後は、戦争は嫌だと思って死んだ人の想念を受け継いで平和を中心とした心の人達が生まれてくる。反面、恨みつらみで死んでいる人の想念も絡み合っているから、今は心の闘争の時代だと言われるのです。無形のものも掴みとろうとするから、さまざまな精神的な不安の時代だとした上で、「生きてる間は楽しく暮らしたらいい」という言葉で締めくくられました。

25年前、事前に何を聞くかの提示もなく、法主さんの「何を聞きたいんや」から始まった私の唐突な質問に、笑顔で瞬時に応えてもらいましたが、再読しても時代という制約にはまらない言葉の意味を私は感じています。また今回は改めて、大倭の立教が8月15日である意味は、それ以前の国家神道の維持や継続ではなく、心の闘争の時代を国の願いではない、福祉として個人の願いの実現に置く法主さんの意向を再確認しました。

すると、歴史上では近代以前のハンセン病との関わりを描く数少ない〝救済〟としての光明皇后の伝承なのですが、〝心の福祉〟としての関係が「交流の家」の背景として浮かび上がります。国家の隔離施設としての療養所ではなく、「交流の家」は、社会参加への足掛かりとして学生・市民の手作りの宿泊施設です。奈良時代にあって悲田院・施薬院という救済施設の設置が、実は国家の政策のリバウンド（はね返り）としてだったという法主さんの指摘と重なり、国の政策とは異なる方向性を内包した思想の実践であるように思います。

法主さんの共同体観

建物は外部から遮断されるので、隔離のシステムが重なりやすい構造があります。しかしそこに住む人を「住苑者」と呼ぶ思想は、ハンセン病問題の一つの視点を考える時、「交流の家」を建てるきっかけとなった鶴見俊輔氏のハンセン病政策への視点とも異なる、法主さんの共同体観が示されているように思います。

最近、木村敏氏の『からだ・こころ・生命』（2015年　講談社学術文庫）などは、今回のテーマと重ねて読んでいました。相模原事件の容疑者はヒトラーが降臨したと述べたそうですが、アドルフ・ヒトラーの『わが闘争　上　Ⅰ　民族主義的世界観』（角川文庫）に、「不治者の断種」とあります。大倭のどのような他者も拒まない思想の対極にあります。

科学は偏見と差別を是正する事もありますが、偏見や差別を補完する事もあると、日本のハンセ

ン病政策で私は学びました。藤野寛氏の『〝承認〟の哲学』（青土社　２０１６年）は、副題が「他者に認められるとはどういうことか」とありますが、私はむしろ「他者を認めるとはどういうことか」の方が、中心的課題として〝承認〟という事柄があると感じています。

聖徳太子は多くの伝承がありますが、存在の論議も含めて明確ではありません。大倭安宿苑の安宿媛である光明皇后も、伝承としての姿から観える印象が多いのですが、法主さんは伝承にある悲田院・施薬院を求めたのでなく、〝心〟の伝承の中で、来る者を拒まない生活の共有が大倭安宿苑であると述べていました。

１９５１年に書かれている山名正太郎氏の『安楽死』（アテネ文庫　弘文堂）では、反対や賛成ではなく無関心を嘆いています。それは現在にも重なると私は思っています。

私はこの時の法主さんとの話しの前に、『おおやまと』平成３年２月号（通巻２４６号）で、「松虫姫の伝説を訪ねて」を載せています。最近、中公新書を大幅に改稿した『天平の三皇女　聖武の娘たちの栄光と悲劇』（河出文庫　２０１６年）を遠山美都男氏が書かれています。そのプロローグが「松虫寺の墓碑銘」であり、エピローグは「松虫姫のゆくえ」となっています。聖武天皇の娘として光明皇后の娘は皇位を継いだから〝光〟、松虫姫は不治の病との伝承があり〝影〟でしょうか。光と影は二面性でもあるでしょうが、光があれば影をともなうという必然の二重構造でもあるとも思えます。

私達に見極める視点があるかどうかは分かりませんが、法主さんの言葉は改めて物事の背景が示している事柄への、俯瞰（ふかん）の視点を指摘していると感じました。

風ぐるま

猫布団

神奈川県大和市
永仮　あづみ

飼い猫の耳の後ろが暖かい。耳をピピピピッとさせる跳ね返しに、あえて顔を突っ込んでいく。寝る時に、冷たい布団に入る時、わくわくして奇声を発したくなる。「ういいいっ」等と発している時もある。飼い猫を抱っこして布団に入っても、大抵逃げる事なく、私のお腹や脇のあたりでゴロニャンしている。布団と猫が大好きである。

自分の性質や他人の性質について考えている。自分の矛盾や他人の矛盾についても考えている。それでも布団と猫が大好きである。そこには矛盾がないのかもしれない。でも、気がつくと、布団は蹴飛ばしているし、自分で半強制的に寝床に連れてきた猫からもそっぽを向いて寝ていることもある。矛盾がないということは、ないのかもしれない。

「純粋な自分らしさ」みたいなものを求めている。自分らしく生きているようにみえる人は、かっこよくみえるからだろうか。でも自分の思う「自分らしさ」は、本当に、私らしさであるのかと疑問に思う。だから私は、度々、子供の頃の私を想像する。しかし、「純粋な」私に近いと思われる子供の頃の自分も、結局は誰かの影響を受けている。この世に産まれてきたその瞬間から、あらゆる「影響」を受けている。それどころか、胎児期から母親と共に生きているのだから、胎児期で既に母親の影響を存分に受けている。母親の精神状態、父親の精神状態、両親の関係性、家族との関係性、時代、場所、環境……そうなると「純粋な自分らしさ」なんてものは存在しない（人間の胎児期は、何億年もの生命の進化の過程を辿るとも言われる。人間だけでなく、壮大な生命の影響を受けている）。「純粋な自分らしさ」を求めていた私にとって、「影響されている自分」を、苦しく感じることもある。でも、出逢いや縁があるから「影響」がもたらされる。そのもたらされる「影響」は、時期によって受け取り方も違うし、変化していくものでもあるのだと思う。

「これが自分であると思い込んでいる自分」を変えたいという欲求が出てくる時もある。そんな「自分」へのアプローチの１つとして、身体へのアプローチがあると思う。当たり前になっている身体の「クセ」を知り、意識していくことで、精神の方にもアプローチできる。この自分自身の身体の「クセ」も、私１人だけで築き上げてきたものではないのだと感じる。その「クセ」に気づくことで、先祖代々の「クセ」を知る。当たり前のように染みついた先祖の遺骨であるこの身体から、自分の「心と身体のクセ」を知る。

逆のパターンもある。つまり、精神へのアプローチが身体へのアプローチとなるということ。自分は、人の幸せを喜べる人間。本当にそうかね？当たり前のことのようだけど、当たり前には出来ていない「人の幸せを喜ぶ」という気の持ち方。「人の幸せを喜べる人間になりたい」そう思った時に、臍のあたりがグッと動いたような感覚があった。魂の尾が、臍のあたりにあるのかどうかは知らないけれど、胎盤と臍の緒を想像した。実際に目に見える臍の緒は、健やかで太く、美しい方が、胎児へのエネルギーが供給されやすそうと想像できる。目に見えない魂の尾が、健やかで太く美しいエネルギーが供給されるような生き方をしたいものである。

布団の中で、猫が携帯の画面をみつめながら、私の鼻に耳をピピピンピンッピと打ちつけている。

あじさい日誌

1月14日　奈良パークホテルで午後4時から邑交会の新年会。

1月15日　大倭神宮月次祭。

1月17日　大本宮拝殿において午前10時半から大倭殖産㈱の70名を越える事業関係者「大倭安衛協力会」により今年一年の安全祈願祭が行われました。

1月21日　大倭会館で午前11時から青山日元さんの一年祭が行われました。お天気に恵まれて賑やかでした。

　ＦＩＷＣ定例委員会は大阪開催。一部のメンバーが交流の家で委員会報告の発送作業をしました。

1月23日　大倭大本宮月次祭。

1月31日　須加宮寮の古くからの住苑者、梅本房子さん（ふうちゃん）は長年週に3日、作業療法の一環として大倭印刷に。最近は歩行が困難、車で送迎をしてもらっていました。それもこの日で最後にすると、副施設長・介護主任さんと一緒に挨拶に来て、大倭印刷社員も全員並んでお別れしました。

　『おおやまと』紙の発送用宛名貼り、封入作業も彼女のお世話になっていたため、今後はどうするか、「求むボランティア」という状況です。

2月2日　教務本庁で午後1時半から3時間半かけて矢追房子・山﨑波留茂さんにより玉緒祭お供え用の3・5キロの豆が煎られました。

2月3日　玉緒祭。

　この日は昭和37年2月3日の法話をお聞きしました（平成18年3月号『おおやまと』に「ママメしく暮らす」として掲載）。参拝の皆さんは祭典後にお豆さんを頂いて帰りました。

2月6日　大倭神宮月次祭。祭典5分前に大雨が止みました。

　夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。

2月8日　有志の方々により帰幽祭のため大掃除や祭典準備が行われました。

2月9日　法主帰幽祭が行われました。前夜からの雪もちょうど止み、午後1時40分から法主奥津城でのご挨拶の後、2時から拝殿で祭典。足元の悪い中、大勢の方がお参りされました。

2月10日　無事年を越した岸ちゃん（84歳）ですが、体調をくずし1月16日以来、日誌の〆日現在も大倭病院入院中。心配を裏切って大人しい入院態度です。

大倭安宿苑では

（須加宮寮）

2月3日　節分にまつわるクイズや、鬼退治に見立てたテーブルボーリングを楽しみました。

（長曽根寮）

1月18日（デイ）　昼食はお鍋・ビンゴゲーム・獅子舞踊り・創作ＤＶＤ鑑賞・鶏の置物作りと盛りだくさんな新年会。

1月19日（特養）　誕生会で11名の方（内白寿1名）のお祝い。

（茂毛蕗園）

1月11日　毎月第二水曜日は先生に来て頂き書道クラブ。

（八重垣園）

1月13日　花びら餅で初釜。

1月26日　防災避難訓練。

急告　紫陽花邑の反保隆臣さん（満88歳）が2月15日午後7時32分に帰幽されました。

金昇允さんが帰幽されました

　かねて自宅療養を続けておられましたが、この2月13日午前6時に亡くなられ、家族葬で見送られました。日本の布施で昭和13（1938）年11月1日に生まれ、満78歳。生前から頼んでいたという法名は、「神倭清真陛比古命（せいしんのぼるひこ）」とのこと。

　法主様に付けて頂いた日本名は「菅野昇」。平成12年5月号の「寸莎」取材時にやはり本名が落ち着くと聞いていたので今回見出しは本名にしました。

　4歳で済州島に戻る。青年期、クエーカー思想の影響で徴兵拒否を考え日本へ密航。当局に知られた時には、弘子さんと結婚していて子供もいた。弘子さんの必死の嘆願運動に、法主様が全面的に尽力され日本に住めるようになったのです。

　弘子さんは、平成28年5月号の「寸莎」取材時に、ご主人が肺ガンであることを話しておられました。（岸野春子記）

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

3月6日(月)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催第578回禊会

3月12日(日)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）

3月15日(水)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大本宮）

3月23日(木)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

ボランティアグループ

「あじさいの箱」
第34回懇親会

ご自由に
ご参加を！

平成29年3月18日（土）11時～14時

■ 大倭会館にて

■ 会　費：1500円（昼食代）

（昼食要予約　且田0595-68-4108まで）

＊大倭安宿苑常務理事・矢追明昌さんのお話

＊活動報告他

こだまことだま

この汚れなき雪を見よ

岡山県真庭市　湯浅　芳郎

　早朝、新聞を取りに出て雪掻き、今日もトランプ記事。世の中どうなっているのか。基本的人権・少数者の意見を尊重しないと人類の将来は悲観的です。大切なのは「寛容の精神」、言葉を深くし、お互いに違いを認めて「私は派手なことがすき」「わたくしは地道な方がすき」全部認めていく。個人個人が自己主張をしすぎて人間としての繋がりがばらばらになっているのではないか。

　先ず、地区の小さなグループで、貧しくとも仲良くすることから始めるのがいい。重なれば大きな力になる。時間はかかるが人間を信じて。など、片田舎で雪掻きをしながら考えている。（2017・2・1記）